

辰巳用水関連施設群

中部地方の
選奨土木遺産

所在地：石川県金沢市 竣工年：1632（寛永9）年以降
管理者：辰巳用水土地改良区

認定理由：小立野台地系を巧みに利用した隧道と開渠・暗渠によって金沢城内外を潤す水路と、横穴・管理道・伏越・専用水路などの関連施設群。

平成30年度登録



中流部は見晴らしのよい小立野台地山腹の散策路になっている。



▲取水された水は、手掘りの隧道（トンネル）を流れる。



▲トンネルの横穴。施工上、管理上必要だった。



▲勾配維持のための三段石垣



▲兼六園に遺される伏越（逆サイフォン）の施設

辰巳用水は、金沢城とその城下を潤す用水として、加賀藩主前田利常の命で町人の板屋兵四郎によって、1632年に建設された。その後、取水口を上流側へ移設し、トンネル長を増やすなどの改良が加えられて、ほぼ現在の姿になった。つまり、北西に細く伸びる小立野台地の地形を巧みに利用した手掘りのトンネル（距離5km弱）と、6kmほどの開水路によって、台地先端の兼六園や金沢城へ導水した。兼六園・金沢城間の百間堀は大掛かりな伏越（逆サイフォン）で通水され、その遺構は今も兼六園の片隅で存在感を保つ。大正末年には、兼六園へ導水する清浄な水を守る専用管が設置され、その延長は土地区画整理事業の進展とともに延びた。これも近代化と共存する辰巳用水の姿である。

昭和50年代、犀川水系の総合治水が計画され、取水口の直下に辰巳ダム建設計画が持ち上がる。代替案も検討されたが、取水口の水没は致し方ないと結論付けられる。これを契機に辰巳用水全体の文化財的価値が見直され、精力的調査の実施はその後の国の史跡指定（2010）へつながる。一方、根強い反対運動があって計画の実施が頓挫していたが、金沢市街地を水害から守る手立てを求める県は、多方面の専門家を含めた充実した委員会を組織し、2003年ついにブレイクスルーを見出した。求められる利水機能を同水系の内川ダム・犀川ダムに振り替えて、洪水調節だけの「穴あきダム」にすれば、辰巳ダムを小規模化でき、予算増なしに辰巳用水の取水口を守ることができる。この「地域の歴史と伝統」を守る案は、確実な議論を経て市民総意のものとなる。かくしてダム竣工後も取水口は遺され、両者の意義を高めるストーリーを伝えている。



▲文化六年辰巳用水絵図（1809、石川県立博物館）辰巳用水の上流部分



辰巳ダム施設に開まれて遺された辰巳用水取水口

